家保だより

第６号　　2006年９月発行

福井県家畜保健衛生所　　〒918-8226　福井市大畑町69-10-1

Tel：0776-54-5104　Fax：0776-54-5966　　E-mail：katikuho@pref.fukui.lg.jp

北陸三県和牛子牛市場が開催されました。

右の写真は、去勢牛の審査風景です

８月24日に、金沢市において北陸三県和牛子牛市場が開催され、３県から計123頭（雌56頭、去勢67頭）が出品されました。第53回福井県若狭子牛共励会では、雌の部で、瓦　惣一さん出品（坂井市）の「かわふく」、去勢の部で、山本　重夫さん（池田町）出品の「第５椎山」がそれぞれ優等賞一席に選ばれました。

概要は次表のとおりです。

	成立頭数(頭)	平均体重(kg)	平均価格(円)	最高価格（円）	最低価格(円)
石川県	50	257.5	521,320	690,000	281,000
富山県	41	261.9	493,300	671,000	303,000
福井県	32	256.6	496,032	668,000	154,000
去　勢	67	270.7	546,418	690,000	281,000
雌	56	244.4	454,907	615,000	154,000
合計(平均)	123	258.7	505,579	690,000	154,000

高病原性鳥インフルエンザの検査にご協力ください。

鳥類のインフルエンザの中でも、特にウイルスの感染を受けた鳥が高率に死亡したり、その恐れがあるものを「高病原性鳥インフルエンザ」と呼んでいます。本病は、ウイルスが存在する家きん、車輌、器具などの接触により感染が拡大します。発生した場合は、家畜伝染病予防法に基づき殺処分となり、経営再開には多額の費用と時間を要し甚大な被害となります。

予防対策として、特に守っていただきたい事は、

① ウイルスを伝播する可能性があるため、野鳥を鶏舎内に入らないようにする。

② 死亡羽数の急増や産卵率の低下などの異常が認められた場合、速やかに家畜保健衛生所や獣医師に連絡する。

③ 鶏舎専用の履物の常備と、出入りの際の履物の消毒を実施するなどです。

家畜保健衛生所では、1,000 羽以上飼養している県内 23 戸の採卵農場を対象に年 1 回モニタリング検査を実施するとともに、毎月 10 日までにファックスまたは電話で飼養羽数、死亡羽数を報告していただいております。現在のところ、異常は認めていません。

また、鶏衛生検査事業として年間 3 回養鶏農場を巡回し、高病原性鳥インフルエンザをはじめニューカッスル病、サルモネラ感染症などの伝染性疾病検査を実施し、疾病の発生予防に努めています。

家畜衛生講習会を受講して

平成 18 年 8 月 8 日から 8 月 10 日まで財団法人 化学及血清療法研究所（化血研）において開催された第 27 回家畜衛生講習会を受講しました。化血研は熊本市の郊外にあり、人体用、動物用を問わずワクチンメーカーとして有名です。この財団法人が公益的な事業としてほぼ隔年で開催してきた家畜衛生講習会は、半世紀を越えたという歴史と、その時々にもっともタイムリーな話題に対し、一流の講師陣を招いて開催されることに高い評価を受けています。

内容は、最近の家畜衛生事情として、農林水産省の前動物衛生課長からＢＳＥに関するアメリカとの協議や鳥インフルエンザの防疫について説明があったのを皮切に、動物薬事、ペスチウイルス感染症、豚の下痢症コロナウイルス、レプトスピラ症、キャンピロバクター感染症、消毒法の再点検、高病原性鳥インフルエンザの感染経路などについて、それぞれ第一人者の講義を受講しました。その中で、「ヨーネ病の現状と将来」という講演について紹介します。

ヨーネ病は慢性頑固な下痢を呈し、治療はできないために、感染牛を発見し淘汰することで清浄化を図ろうとしていることはご存知だと思います。ヨーネ病を起こすヨーネ菌は結核菌やらい菌と親戚の細菌で、細胞の中で増える性質があります。このため、一般的な病気の際にその病気を治そうと産生される抗体は、ヨーネ病の場合にはうまく働きませんし、初期にはつくられることもありません。

その代わり初期には細胞性免疫というのが働き、一応ヨーネ菌を押さえ込みます。この細胞性免疫を測る方法が人や牛の結核検査で行なわれるツベルクリン反応（ツ反）で、ヨーネ病の場合はヨーニン反応と言います。ただ、ツ反は感染後長く陽性反応が続くのに対し、ヨーニン反応は感染後早い時期に陰性にな

ってしまいます。このことが、結核がツ反で撲滅できたのに、ヨーネ病はヨーニン反応だけでは撲滅できない理由です。

このように、感染中期ではヨーニン反応も陰性で抗体も測れない時期が何年かあり、その後、発症前になるとようやく抗体が測定出来るようになりますが、これが現在5年ごとに実施しているヨーネ病検査です。本当は感染したすべての牛を検出できる方法があれば清浄化が早く達成できるのですが、時々排菌していても、検査ができない時期の牛がいることが清浄化を困難にしています。

現在実施している検査方法はかなり検出感度が高い方法ですが、前述したような病気の性質上、検査によって摘発できる牛は感染牛の一部でしかないことは避けられません。検査陽性牛を頂点にし、その下に検査陰性の感染牛がいて、一番下に健康牛がいるという感染群のピラミッド構造と呼ぶ状況にあります。

5年に一度の検査で陽性牛が発見された場合には、その後3年間は繰り返し検査を実施することにより、次々とピラミッドの頂点を排除し、清浄化に近づけて行くという方法を取ります。この間、消毒や牛の移動自粛などいろいろやっていただくことも多いのですが、清浄化しないとその後大きな被害を受けることになります。

講演では、さらに高感度で広い時期をカバーする検査法の開発状況の説明もあり、今後より効果的な検査法が公定法に取り入れたなら、当所も対応していきたいと思います。また、日本は諸外国に比べ対策がすすんでいることの説明もあり、最新の技術と絶え間ない努力で必ず撲滅できるものと思いますので、今後もご協力おねがいします。

（仲村）